



今までで一番懐かしいこと

ジャウ

私が小さかった頃、うちの庭の真ん中に大きな木があった。松と違って、そんなに高くなくて、形はまさに傘のようで、遠くから見れば地上に落ちている草の帽子みたいだった。思い出の中のその木は、いつも緑でいっぱいだった。秋になって、その枝に黄色い果実がなった時、長い枝は地に垂れて、木は緑と金色の小屋になった。冬が来ると、雪が木の上に積もって、木は雪の山にも見えた。

その頃、私は祖父母と従姉と暮らしていて、年の近い従姉と私は仲良しで、毎日庭で遊ぶのが好きだった。ある時には枯れた木の葉を集めて、それに火をつけたり、ある時には木に登って、鳥の巣を探したり、雪が降った日には木の下で遊んだりしたこともあった。私の幼い頃の思い出はその木に関する事ばかりだ。

何時のことだったのかはもう覚えていないが、その木が家の庭から突然消えた。祖父の話ではその木はもうずいぶん古かったらしい。その事があってからまもなく、従姉は他の町に行き、私も両親と一緒に暮らすことになった。

今でも台湾に帰った時に、従姉と祖父母とは会う。そして、その木の事は小さかった頃の思い出と共に今でも忘れられない、私にとって一番懐かしいことである。

Reproduced with permission of H. Zhao